

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その2 木喰い虫の音楽)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

2010年6月に神奈川県立近代美術館 葉山で開かれていた「話の話—ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン & ヤールブソワ」展を観た。ユーリ・ノルシュテインはアニメーションの世界的巨匠で、「話の話」をはじめとする彼の作品は素晴らしい。LD (現在はDVD) でいったい何十回観ただろうか。その彼の展覧会を知ったので足を運んだのである。会場ではDVDにはない短い映像「冬の日 (狂句 木枯の身は竹齋に似たる哉)」が放映されていて、藪医者竹齋が紅葉の幹に小型のラッパのような聴診器を当てて音を聴いている場面があった。図録にも「幼虫が木をかじるのを聴く竹齋」というユーモラスなコラージュが載っている。木をかじっているのはゴマダラカミキリの幼虫でもあろうか。

オペラ《フランチェスカ・ダ・リミニ》で知られるイタリアのリカルド・ザンドナイ (1883～1944) に《二匹の木喰い虫》と言う歌曲がある。ソプラノ歌手佐藤由子さんのCDを聴く。二匹のキクイムシがいて、一匹は墓地で偉大な人の頭の中を這いまわりながら生まれる思考の芽を観察し、もう一匹は彼の書いた書物をかじっているという内容の歌詞である。まるで一匹がシテムシ、もう一匹はシバンムシかシミのようである。作詞家が小



ザンドナイ：二匹の木喰い虫
ソプラノ：佐藤由子
Victor NCS-298

さなキクイムシに注目するとは考えにくいのでカミキリムシの幼虫でも指しているのかと思ったがそうでもなさそうだ。一体何の虫をイメージしたのだろうか。

ある種のシバンムシの成虫は家屋の柱の内部で頭部を打ち付け「カチ・カチ・カチ」と音により雌雄間の交信を行っている。英名の death-watch beetle はこの音を死神が持つ死の秒読み時計 (death-watch) になぞらえて付けられたそうだ。したがって和名は「死番虫」よりも「死時計虫」が適切であるとする説を聞いたことがある。

この音を音楽にしたのがデンマークの作曲家ルーズ・ランゴー (1893～1952) の《シバンムシ》である。ピアノ曲集《インセクタリウム》のなかの一曲で、シバンムシがカチカチと立てる音をピアノの蓋を叩くことで表している。

2007年に初演されたジョナサン・ダヴ (1959～) の歌劇《ピノッキオの冒険》をDVDで観る。体調が悪くなったピノッキオ (ピノキオ) を、カブトムシ、フクロウ、カラスの三人?の医者たちが色々な病名を挙げて診断する。ピノッキオが木材であることから、枝腐れ病 (twigrot)、芽疱瘡 (budpox)、幹気管支炎 (trunkitis) といったようないい加減と思われる病名を挙げ、それともシバンムシや woodworm, budworm などの害虫にやられたのかもかもしれないとユーモラスに歌われる。

独立行政法人森林総合研究所の高梨琢磨博士が珍しいキクイムシのCDを教えて下さった。アメリカのピニオンマツ *Pinus edulis* を加害する甲虫が木の中で立てる音を録音したアルバムである。キクイムシ科の *Ips confusus* が中心で、他の *Ips* 属、*Dendroctonus* 属の樹皮加害甲虫やカミキリムシなどの音が混じっているかもしれないそうだ。ほぼ1時間に亘るこの音をひたすら聴いているとまるで音楽が奏でられているように聴こえ、自分自身が木材の中にいるような気がしてきた。初めに書いた竹齋にもこのような音が聞こえていたのだろうか。